



しあわせのパン



三島有紀子

中学1年生・高校1年生の皆さん、ご入学おめでとうございます。ほかの学年の皆さんも、ご進級おめでとうございます。昨年度の4月は会えませんでした。今年はお顔を見ることができてとってもうれしいです。4月12日はパンの記念日。メロンパンがはやったり、高級食パンがはやったり、何度かおおきなブームが到来。神戸市はパンの購入金額1位になったこともある街なんです。ドンク、フロインドリーブ、イスズベーカー、ピゴの店、トミーズ、ル・ディマンシュ、サ・マーシュ、パネ ホ マレット...老舗のお店も新しいお店もたくさんあります。そんなパン文化に育った私たち。今回紹介するのは「しあわせのパン」。映画から生まれた小説です。北海道の月浦にある小さなオーベルジュ式のパンカフェ「マーニ」が舞台。水縞くんとりえさんが心を込めてつくる、パンと手料理とコーヒーが自慢のお店です。はるばる訪れるお客さんや、地元の小学生との交流が描かれていて、どれもほっとするおはなしばかり。エピソードのひとつに神戸から来た老夫婦のおはなしがあります。妻の病状が悪化し、ハネムーン以来50年ぶりに月浦を訪れたふたり。ひとり娘の有月を阪神淡路大震災で失い、家業である銭湯もたたんでしまい、最後に思い出の場所で月を見ようとしたのでした。「カンパニオって言葉があるんです。僕はその言葉が大好きでして。もともとの語源は、“パンを分け合う人たち”のことなんです。カンパニオ、さて、どんな意味でしょう」水縞くんが夫の史生さんにクイズを出します。カンパーニュの語源でもあるこの言葉。答えは読んでみてのお楽しみなのですが、あったかい言葉だなあ、と思いました。ほかのおはなしに出てくるパンやお料理、スープもとってもおいしそう。みんなで食卓を囲む、パンを分け合う、という行為に、胸がいっぱいになります。水縞くんとりえさんの夫婦にも少し事情があるのですが、りえさんが好きな「月とマーニ」という絵本が鍵になっています。その絵本も特別付録として巻末に収録。これを読んだあともう一度小説を読み直したくなるような、すてきな絵本です。おいしいパンが身近にあるしあわせを感じられる1冊でした。図書館には映画のDVDもあるので、よかったら観てみてくださいね

三島有紀子

大阪市出身。18歳からインディーズ映画を撮り始め、大学卒業後NHKに入局。「NHKスペシャル」「トップランナー」などドキュメンタリーを数多く企画・監督。03年に独立しフリーの助監督として活動後、『しあわせのパン』(12年)、『ぶどうのなみだ』(14年)と、オリジナル脚本・監督で作品を発表。撮影後、同名小説を上梓した。企画から10年かけた『繻い裁つ人』(15年)は、第16回全州国際映画祭で上映され、韓国、台湾でも公開。『幼な子われらに生まれ』(17年)では第41回Montreal世界映画祭で最高賞に次ぐ審査員特別大賞に加え、第41回山路ふみ子賞作品賞、第42回報知映画賞では監督賞を受賞し、好評を博した。

